[論　文]

札幌オリンピック招致ポスターから見える北海道・アイヌと内地の境界

渋　谷　　努

はじめに

2020 年に開催が決定した後、オリンピックポスターに関する盗作問題がマスコミなどを中心に問題とされた。今回の盗作騒動ほど大きなものでなかったとはいえ、1972 年に開催された札幌オリンピックを招致するためのポスターが公表された際にも、大きな反響があった。この栗谷川健一によって描かれたポスターは、オリンピック会場の前にアイヌの男性が弓矢を持ちアイヌの正装であるアッツシを着てすっくと立っているものである。本論では、新聞の読者欄に投稿された意見を通して、ナショナルイメージを表すと考えられがちなオリンピックポスターにアイヌが描かれたことによる国民及び北海道民の反応を明らかにする。そこから当時の日本という想像の共同体（アンダーソン 1997）の中での北海道及びアイヌの位置付けの多

図 1　札幌オリンピック招致ポスター

様性について考察する。

これまでの日本人の境界は、小熊（小熊 1998）やましこ（ましこ 2002）により政策や学問上での境界の形成過程が他者としての台湾や朝鮮半島、沖縄、そしてアイヌとの関係から論じられており、また加藤により文学上での日本人の境界の形成過程が論じられている（加藤 2017）。さらに、本論と直接関係するアイヌと日本人との関係に関しては、文化人類学、民族学の学問形成過程とアイヌの他者化の過程に関する木名瀬の研究（木名瀬 1997、1998）や、文学や言語学の形成過程と「滅びゆく民族」としてのアイヌ学の成立を論じた丸山の研究がある（丸山 2002）。本論でも、これらの研究で論じられてきた言説としての日本人の境界とその外部に、他者として形成されたアイヌ人イメージに基づいて論じる。しかし、本論では、このような日本人とアイヌとの言説レベルでの相互関係が、言説に取り巻かれている個々人レベルでどのように影響するのかを札幌オリンピック招致ポスターとその反響を新聞への投書を通して考察する。

オリンピックは国家規模で行われており、そこでオリンピックに関わるポスターは自国を他国に対してどのように見せたいのかが争点となる。東京オリンピックのポスターを分析したトラゴノーによると、1964 年の東京オリンピックのポスターでは、富士山、芸者、寺院、菊といった歪んだ日本のイメージを用いることはなかった。1960 年代のデザイナーにとって、日本の新しい地位は、西洋に従属するエキゾチックで女性的なメタファーではなく、幾何学、抽象的なパターンにあると考えられていた。それに対して、幻におわった 1940 年の東京オリンピックのポスターは、男性アスリートを描いており、それは強い肉体から軍国主義を思わせるものだった（traganou 2011：468）。

さらに、招致が決まった後の札幌オリンピックのポスターを決定する際には、札幌オリンピックの組織委員会としては、東京大会との連続性を強く意識していた。というのも、札幌オリンピックが単なる雪国の地域大会

と化するおそれがあったからである。札幌オリンピックをデザインした永井は、日本を象徴するものとしては日の丸を決めていたといっている。さらに亀倉雄策氏の傑作である東京オリンピックのマークは世界に誇るべきものであり、このイメージをどこかに継続することは日本として得策ではないかと考えたため、日の丸を大きく扱うことにしたという。それゆえ「大会マークの制定についても、単に北海道、札幌のシンボルではない全日本的な日の丸をテーマに」設定し、東京オリンピックとの連続性をも意図したというわけである（加島 2017：63)。

日本のオリンピックのポスターを見てみても、札幌オリンピック招致ポスターの異質さがわかる。そこで、本稿では北海道イメージ形成に大きな影響を与えたアイヌと北海道観光に関して論じた後、札幌オリンピック招致ポスターを作成した栗谷川健一の北海道及びアイヌ観を明らかにし、栗谷川が招致ポスターを通して表現したかったことを析出する。そして、それを見た人々の反応を読書欄から拾い出し、下からの日本、北海道、アイヌイメージを浮き彫りにする。

アイヌイメージと北海道

北海道観光とアイヌとの関わりは長いものだが、東京を中心として日本中にそのイメージを植え付けたのは、博覧会や展覧会、そして観光ポスターを通してだった。1932 年には 4 公園が追加指定され、全部で 12 となった国立公園を紹介する展覧会が、東京の伊勢丹デパートで開かれた。翌 1933 年 6 月には、同じく東京の伊勢丹デパートで『観光の北海道展覧会』が開催された（主催：東 京鉄道局、日本旅行協会、札幌鉄道局、北海道庁)。ここでは大雪と阿寒の両国立公園のジオラマが展示され、阿寒は摩周湖と屈斜路湖の展望が再現された。その展覧会において、復元したチセ(アイヌの家）と そこでの熊彫の実演や白老の宮本伊之助（エカシマトク)

氏 の講演も行われるなど、アイヌ文化が呼び物となっていた。大正の末に八雲と旭川で製作が始められた木彫り熊は、1930 年代に急激に普及したものと見られ、このころ阿寒でも熊をはじめとする木彫りが製作・販売されるようになった（斎藤 1999：115）。

そのような観光業が可能となるのには交通網の発達と宣伝が重要となる。齋藤は、1960 年代は、国鉄の周遊券販売をはじめ航空機やフェリーの便も良くなり、全国的に陸・海・空路ともに交通事情やパック旅行が充実して、宿泊を伴う観光旅行に参加する割合が急激に伸び始める時代であったことを指摘している。1963 年の観光基本法の制定、1964 年の東京オリンピック、海外旅行の自由化、東海道新幹線・名神高速道路の開通などをうけて、引き続き観光旅行が市民に浸透する時代であった（齋藤 2001：38）。このような交通網の発達と簡便化により、特に戦後の日本は旅行がブームになっており、北海道もその流れに乗って行こうとした。

北海道では、1954 年の国体、1972 年の札幌オリンピックにより、旅行先としての注目度もさらに高まった。この間、1968 年には「開道百年記念」を関する事業が多く開催され、博物館の開館や出版物の発行も相次いだ。道路の除雪事情が良くなり、全道的に冬の観光にも力が入れられるようになった。1964 年には知床が国立公園に指定され「地の果てブーム」と呼ばれる時期に入り、札幌や函館といった有名観光地のみならず、知床と阿寒のセットで道東周遊を行うプランなども増えた。「一生に一度は北海道」から、繰り返し音づれ流旅行者も多くなってきたとみられ、北海道旅行にもバリエーションがではじめた（齋藤 2001：38）。

1950 年に国鉄は、北海道内に札幌、旭川、釧路、青函の四つの鉄道管理局を設置した。各管理局は 4 地域に分けられた道内の路線を管理するとともに、各種の営業活動にも当たった。その一方で 1957 年には、より強い権限を持つ北海道支社が設立した。北海道支社は、各管理局の業務を管理し調整する一方で、より広域的な企画活動や営業活動を行なった。そこ

で、北海道支社の業務区域が広域自治体である北海道の範囲と合致した(鎌田 2012：98)。

この国鉄の運営のあり方が観光の仕方にも影響を与えた。北海道の観光宣伝は、各管理局が区域内の市町村や観光協会とともに地元の観光資源を売り込むものと、国鉄北海道支社が北海道及び北海道観光連盟とともに北海道全体のイメージアップを図るものとの2層構造で展開されていくこととなった（鎌田 2012：99)。北海道内の各管理局から依頼されたポスター、すなわち個々の観光地を宣伝するポスターでは、その場所を特徴付ける景観やその地に固有のエピソードに基づいた絵柄が盛り込まれるようになった。その中で、栗谷川は国鉄からの依頼を受けて北海道各地の観光ポスターを作っていく。

さらに1958年の7月から開催された「北海道大博覧会」(1958年7月1日～8月31日)は、札幌の中島公園と桑園を舞台とした。この博覧会は北海道行政が主催した博覧会としては前例のないほどの大規模なもので、入場者が195万人という圧倒的な反響を見せた。そのなかでアイヌに関する展示の記録によると、中島公園に設置された「郷土館」のパビリオンに「アイヌ小屋」が設けられており、「和人が北海道に移住する前のアイヌ民族の風俗を展示するアイヌの服装装身具武器宝物等の実物学術的考証に基づく家屋などで構成し当時の生活文化を再現していた（崔 2012：103)。またこの頃は、『挽歌』『森と湖のまつり』など阿寒周辺を舞台にした小説がベストセラーになり、阿寒が周知されることになる。アイヌの経済生活を担う一方で、熊彫りやアツシ織などのみやげをとおして「原始生活をいまもいとなむ」アイヌの偏見を含んだイメージが日本中に流布していった(大塚 1996：112-113)。

本稿に関連させて、オリンピック招致の際に北海道およびアイヌの「滅びゆく民族」というイメージがどう反映されたのかをみてみよう。第11回冬季オリンピック開催地を決めるIOC総会の投票の前に、病気のため

総会を欠席した高石 IOC 委員の録音されたコメントが流された。この訴えは、聞いていた委員たちに感銘を与え、開催地決定に影響を与えたと言われている。そのコメントの中でアイヌについての言及がある。

> 札幌は、日本の四つの大きな島の一つである北海道の中心都市です。しかし、北海道は、歴史的に、日本の他のところとの関係においては、非常に特異なものです。北海道は、将軍制度により、そして明治政府が実権をにぎるまでは、アイヌと呼ばれる少数の土着民族の住む島として、ほとんど気にもとめられていませんでした。(オリンピック冬季大会札幌招致委員会 1966：48)

ここで高石が用いている英語表現を見てみると、as a land inhabited by the diminishing aboriginal tribe called Ainu、と表現されている。日本語訳では少数となっている diminishing は文字通り減少しているという意味であり、滅びゆく民族という意味合いが込められていると考えてもおかしくない。

札幌オリンピック開催決定及び招致ポスター作成までの経緯

当時の新聞記事を追いながら、札幌オリンピック誘致活動の中での栗谷川の活動及び招致ポスターができるまでのプロセスについて見ていこう。

「冬のオリンピックを札幌で」ということばが夢から実現へ向かってスタートを切ったのは今から三十年前だった。1935 年札幌市が冬季大会招致運動を進め国内 6 ヶ所の開催希望地から選ばれ、二年後の IOC 総会で 1940 年の第 5 回大会開催地に決定した。だが国際情勢が戦乱の様相を呈し、日華事変のため政府は夏の東京大会とともにオリンピックを返上、札幌は涙をのんだ。(北海タイムス 1966 4/28)

戦後 1964 年の夏季大会が東京に決まってから、再び札幌に冬季大会を招致する気運が盛り上がり、1960 年軽井沢、日光など開催希望地と日本

の統一候補の座を激しく争ったすえ、国内競争を勝ち抜いた。JOC、政府の承認を得て、はなばなしく名のりをあげた。招致関係者は札幌確定をほぼ確信していたが、1964年のインスブルックIOC総会では、結果は惨敗に終わった（北海タイムス 1966 4/28）。

招致活動の展開の中で、栗谷川の活動が新聞に取り上げられた最初は1965年8月25日付の北海道新聞で、招致運動の各文書に用いられる札幌会場全体の鳥瞰図が完成したことが報じられている。1968年に冬季五輪の候補地として札幌が提出した書類が、文字が多く視覚に訴える力が弱かったという反省もあり、今回は迫力のある鳥瞰図を用いてPRするという意図のもとで作成された（北海道新聞 1965 8/25）。同年9月になると鳥瞰図を含む海外向けPR用のリーフレットが完成したことが報道された。リーフレットには、ウインタースポーツの街、札幌や競技場の施設について英仏2ヶ国語のバージョンで説明されており、さらに栗谷川の作成した鳥瞰図とともに、雪まつりやゲレンデで遊ぶ子供たちの写真が掲載されていたと報じられた（朝日新聞 1965 9/29、北海道新聞 1965 9/30）。

次に、報道されたのは招致ポスターが発表された時だった。昭和41年2月12日に朝日新聞と北海道タイムスで報道されている。読売新聞ではポスターについて「スキー会場に予定されている手稲山、恵庭岳を背景に札幌市と競技場完成予想図が描かれ、その前には儀式装束に身を固めたたくましいアイヌが浮き出る奇抜なデザイン」と報じている（読売新聞 1966 2/12）。一方北海タイムスでは「札幌市、エゾ富士および冬季五輪会場予定地の鳥瞰図を背景に弓を持って狩猟しているアイヌの勇士が力強く描かれている」となっている（北海タイムス 1966 2/12）。ここで言っているエゾ富士とは羊蹄山のことである。これら2社での報道の仕方の違いとして、背景としての地理的風景の描写と中央に描かれているアイヌの描写の違いが挙げられる。読売新聞では背景に描かれている山々を手稲山、恵庭岳として紹介している。これはポスター自体にローマ字表記している

ものを紹介しているのだろう。それに対して北海タイムスでは、ローマ字表記している地名のことには触れず、アイヌの人物の後ろに控えている蝦夷富士と呼ばれる羊蹄山と思われる山についてのみ言及している。ポスター自体には蝦夷富士とも羊蹄山とも書かれてはいない。

中央に描かれているアイヌに関する描写も異なっている。読売新聞では、儀式装飾を着たアイヌと描かれているのに対し、北海タイムスでは弓を持っていることを強調することでアイヌ男性が狩をしている勇士として描いている。アイヌが着ている伝統衣装であるアッツシに注目することで儀礼装束という表現になり、またその公式さが招致ポスターとしてふさわしいと捉えることができる。それに対して北海タイムスではアイヌ男性が手にしている弓に注目することで狩猟採集民としてのアイヌを強調していると捉えることができる。

招致ポスターの選考過程に関して、文献資料を探してみたが寡聞にして、選考過程に関する資料を見つけることはできなかった。栗谷川は、札幌オリンピック招致委員会の広告専門委員の北海道部会のメンバーになっていた。広告専門委員は東京部会に5名、北海道部会には6名から構成されていた。11名の中、美術関係のものは栗谷川一人であり、選考にあたっての栗谷川の影響力の強さが伺える（オリンピック冬季大会札幌招致委員会1966：27)。選考過程としては、栗谷川が書いた候補作を、広報専門委員会で審議し、それを招致委員会で審議し承認したというプロセスを想定できる。

当時のポスター依頼側と制作側との間での内容に関する取り決め、何をどのように描くのかがどのように決まっていくのか。栗谷川に関する著作もあり、当時の商業芸術にも詳しい北海道立近代美術館の鎌田氏によると当時のポスター制作の際には、どこの観光地のポスターを作るかの指示は依頼者側が行うが、そのポスターの要素としてどのような素材を用いるかは、ポスター製作者の判断に委ねられていたという[1]。最終的に依頼者側

との合意が求められるので修正されることもあるだろうが、多くの場合、製作者側が、その土地を象徴的に示すものをポスター内で描くこととなる。

それでは、招致委員会はポスターの要素として盛り込むべきものを栗谷川に何か指定していたのだろうか。結論から言えば、何も指定することなく栗谷川はフリーハンドの状態で招致ポスターを描いたのではないかと推測できる。なぜなら、北海道現代美術館には、ポスターの下書きと考えられるものが 6 点保管されている。基本的に背景は一緒で、実際に採用された招致ポスターと同じでオリンピック競技場や山々が描かれている札幌の風景である。6 枚のうちの 2 枚にはアイヌの男性が描かれてものであった。

最初にそのほかの 4 枚を見ていこう。一枚は、書きかけのものであるが、背景の前にスキーウエアーに身を包んだ一人の男性が立っているものである。男性の表情からは、日本人ともヨーロッパ系の男性とも見える。男性の手前に空間が残っているがそこに何を描こうとしたのかは不明である。栗谷川の表現を借りれば「バタくさい」印象がある一枚である。もう一枚は、背景の手前にもうひとつ山を描き、そこから四人のスキーヤーが滑り降りているものであり、スピード感のある栗谷川らしい作品である。四人を遠くから描いているためその人種、民族などは分からない。この 2 枚はウインタースポーツを前面に出し、日本や北海道らしさは感じられないものである。

もう一枚は背景の前に雪が積もった灯籠が一つ描かれている。この灯籠がどこのものかは分からない。日本的なものを灯籠によって表そうとしたのかもしれない。また、1958 年に栗谷川が描いた東京オリンピック招致ポスターでギリシャ神殿の柱の後ろに五重の塔が描かれているのを思い起こさせるものである。4 枚目は、背景である札幌に向かって馬がソリを引いている絵であり、ソリには一人の男性と女性が描かれている。男性は立って馬の手綱を持っており、赤いコートを着た女性はソリに座っている。この絵は栗谷川が描く開拓地としての北海道イメージに沿ったものと言える。

アイヌの2枚の絵は、招致ポスターに採用されたものと基本的な構図は一緒である。違いは一枚が招致ポスターよりも年配のアイヌ男性を描いているところである。もう一枚は招致ポスターと同年齢くらいの男性が描かれているが、衣装などに招致ポスターとの違いがある。年長者の方は頭髪もヒゲにも白髪が目立っており、アイヌの長老をイメージしていたのだろう。

このように招致ポスターの下絵には、アイヌだけではなくウインタースポーツを描くことを目的にしたものや日本、北海道をイメージしたものであり、共通のテーマを見出すことは難しい。これら残された下絵から見ても、招致委員会が何らかの要請を栗谷川にしたとは考えにくく、招致ポスターにアイヌの男性を描いたのは、栗谷川の判断によるものと考えることができる。

招致ポスターへの反応

招致ポスターが公開されるとすぐに新聞紙上に読者の意見が掲載されるようになった。ポスターが報道された1966 2月12日での北海タイムスでは「天地人」という短く文章で世相を斬るコーナーでは「冬季オリンピックのポスターはアイヌの勇士。“市民不在”の招致運動を象徴する」と述べている（北海タイムス 1966 2/12)。招致運動を批判する手段として招致ポスターを用いているが、そこでは、アイヌを描いても「市民不在」とし、札幌市内にあたかもアイヌが当時住んでいない、またはアイヌに市民権を認めず排除する形の表現がなされていた。

その後、各紙の読者からの投書欄に招致ポスターへの批判の声が掲載されていった。ポスターが公表されてから1週間後の2月19日に朝日新聞の投書欄「声」のコーナーに「アイヌの狩人姿使う札幌宣伝に反感」という意見が掲載された。投書したのは横須賀市に住む16歳の学生であり、

ポスターを見た感想として

それ（招致ポスター）は雪山を背景にアイヌの狩人姿が大きく描かれたものだった。外国の教科書には、今でも日本人がちょんまげ姿でいるかのように書かれているという記事を読んだことを思い出し、このポスターに反感をもった。

確かにアイヌは北海道にふさわしいものかも知れない。しかし日本の都市を宣伝するポスターとして、あのような弓を手に持ち刀のようなものを肩から下げた姿はどうかと思う。(朝日新聞 1966 2/19)

この意見のポイントは、アイヌを描くこと自体を否定しているのではなく、その構図が弓矢や刀から狩人をイメージさせることが日本人へのマイナスイメージになることへの反感を述べている点だった。さらに、海外向けのポスターであるために、海外に「誤った」イメージを与えることを懸念する意見であり、同様な趣旨の意見はその後も続いていくことになる。

4月22日には北海タイムスに手稲町（現在札幌市内）在住の会社員（58歳）から「誤解招くアイヌと熊　五輪ポスター再考せよ」という読者からの声が乗せられた。そこでは、招致ポスターに関して、先に述べた「天地人」での批判に賛意を示したのちに

明治百年―北海道をアイヌとクマで「売る」時代はもう過ぎたのではないか。

国内向けのポスターならまだがまんもするが、海外にも送るのだという。弓をたずさえた異様な姿の男が、異邦人の目にどう映るかは、招致委員会では考慮ずみなのだろうか……

そうでなくとも、海外では依然として日本を「ハラキリとゲイシャ・ガールの国」と誤解しているものが多いと聞いている。その誤解に輪をかける愚は避けるべきだと思う。アイヌの勇士に代えて、スポーツは万国共通のものという観点から、例えば飛躍しているジャンパーを描くとか、銀盤に舞うスケーターを描くとか、もう一つくふうがあっ

てもよいのではないか。(北海タイムス 1966 2/21)

と海外に日本の誤ったイメージを与えてしまうことを危惧している。このようなアイヌを日本の象徴として用いることに対する疑義とそこから派生する日本の「誤った」イメージを海外に持たせてしまうことを危惧する意見は当時の外務省高官も言及した。

このポスターについて新関外務省情報文化局長（当時）

日本人にはアイヌとわかるが、刀を腰に、弓を持った姿は、外国人が見たらやはりサムライ。外国人は日本人というとすぐサムライに結びつけがちだ。またエゾ富士も外国の人は、競技場のすぐそばに富士山があると考えるでしょう。私たちが外国の教科書や百科事典の中から“誤った日本”を訂正しようと努力しているのに……。いまさら間に合うことでもないが、十分に検討したかった。(読売新聞 1966 2/27)

と語り、それまでの読者欄の声をまとめるかのようなコメントを残している。

1966年3月1日の北海タイムスの夕刊コラムである市川謙一郎による「一日一言」は「ポスター落第　札幌のPRの下手さ」と題して、上記外務省の意見と同様にポスターの不適切さとそれを採用した札幌市の広報の不味さを指摘している。

図柄は、中央に弓に矢をつがえたアイヌ男の姿をえがき、背景雪の連山をあしらったものだが、まず札幌には、ポスターに書かれているようなアイヌはいないし、第二に、外国人が見たらサムライと誤解するだろう、第三に、背景の山なみの中にエゾ富士があるが、これは本ものの富士山と誤解され、富士の近くで大会が開かれるような錯覚を与える心配ありというものだ

外務省がにがい顔するのは重々もっともである。ポスターの下部には五輪のマークがあり、その下に大きくTO・SAPPORO・JAPANとあるのだから単なる観光宣伝用でないのはたしかだが、そうだとす

れば、画面の主題はスキーとかスケートとか、冬季オリンピックの花形種目を扱って、アピールするのが本当だろう。スポーツとは縁もゆかりもないアイヌなどをひっぱり出したこと自体がおかしい。スポーツ大会のポスターなら、あくまでスポーツを主題としない図柄を選ぶこと、そうでないなら、それだけで落第である。

また、外務省が指摘しているとおり、こういう民族衣装をしたアイヌ族はもういないし、外国人のエキゾチシズムにこびて、いつまでもアイヌを北海道のシンボル扱いにする安直な考え方にも疑問がある。たとえば、アメリカが何かのスポーツ大会のために作ったポスターにインディアンをあしらった図柄があったとしたら、どうだろう。アメリカには今でもインディアンの子孫がいてグランドキャニオンなどの観光地では、わざわざ古い粉装（ママ）をつけて踊ってみせるのがいるが、完全な見世物化している。それをポスターなどで宣伝したら、集まった観光客は一斉ににがい顔をするだろう。すなわち、観光用としても、これまた落第である。……（北海タイムス 1966 3/1）（強調筆者）

さらに昭和 41 年 4 月 27 日に札幌での冬季オリンピック開催が決まった後でも、4 月 29 日の市川謙太郎による夕刊コラム「一日一言」は「ポスター是非　札幌五輪とマスコミ」と題して、先のコラムと同趣旨の記事を載せている。

東京で開かれた札幌オリンピック招致委員会の新聞写真をみると、会場に PR 用のポスターが飾ってある。アツシを着て、弓矢を手にしたアイヌ人の図柄で、先ごろ来問題になっていた例のポスターだ。なるほど背景には白銀に輝く本道の山々が描かれ、ポスターの下部には五輪のマークや「札幌オリンピック」の文字が書いてある。が、アイヌの姿の印象が強烈なので、どう見てもアイヌ族の宣伝ポスターとしか受け取れない。

札幌オリンピックはアイヌ族と全く無関係である。また、札幌とアイヌ族とも直接関係はないし、たとえ関係があったとしても、いまどき、こんな古風なアイヌ族は残っていない。図柄としては面白いが、オリンピックの宣伝のために作られたポスターとしては、主題の点で大きくツボをはずしている……（北海タイムス 1966 4/29）（強調筆者）

これらの市川の発言は、読者欄の声で指摘されているようなアイヌを日本や北海道のシンボルとして用いることへの疑義と、今回の招致ポスターが観光ポスターのようでありオリンピックのポスターとしての不適切さを指摘している。さらに市川の指摘で特徴的なのが、筆者が協調した箇所にあるように、3月1日の記事では「こういう民族衣装をしたアイヌ族はもういない」と言っており4月27日には「札幌とアイヌ族とも直接関係はない」など、すでに論じたようなアカデミックな世界で指摘されていたアイヌは「滅びる民族」であり、過去の存在であり、現在の札幌には関係がなくだからこそ札幌オリンピックにも関係がないという論点を出している。

当事者であるアイヌから出されたコメントは、読売新聞2月27日に報じられた

札幌市内ではこのポスターに対し「いまさらアイヌでもあるまいし」「絵としてすばらしい。アイヌを出しても問題はない」など賛否両論があり、またアイヌ民族で作っているウタリ協会＝野村義一会長＝は「アイヌをいたずらに観光宣伝に利用するのはやめてほしい」と札幌市に申し出るいきさつもあった。（読売新聞 1966 2/27）

という、招致ポスターを観光宣伝として捉え、これまでのように観光資源としてアイヌが利用されることに苦言を呈している。どうような趣旨は読者欄でも出されている。朝日新聞の1966 2/25 に岩手県に住む女性から次のような投書が来ている。

冬季オリンピックを札幌へ、と呼びかける宣伝ポスターにアイヌの姿

が扱われているのに反感を持つというご意見が先日のこの欄に出ていました。北海道で生れ、学校友達に仲よしのアイヌの娘さんがいた私にとって、北海道の観光にアイヌをひっぱり回すのさえ、にがにがしく思っていました。アイヌは見世物ではありません。

札幌には雪祭という素晴らしい雪の芸術があります。それこそ冬季オリンピックにふさわしいと思います。

というように、観光資源としてアイヌを用いることに対する反対として招致ポスターを批判するものもある。

海外への悪影響を心配する声が多い中、このポスターは海外でどう評価されたのか。ポスターが開催決定に影響を与えたかどうかはわからないが、北海道新聞が4月に以下のように報道している。

夏季大会に立候補しているミュンヘン代表などは、わざわざ飾りつけ作業をやめて見にきたが「夏冬各都市の中で一番すばらしい」と手放しのほめよう。飾りつけを手伝うイタリア人も次々にやってきては、じっと見入っている。日本で問題になった招致ポスターもここでは人気のまと。日本代表はこうした展示会場の好評ぶりを総会の評決にも反映させようと、最後の追い込みにファイトを燃やしている（北海道新聞 1966 4/22)。

このように人気のまとと書かれており、それはエキゾティズムを引き起こしたのかもしれないが、少なくとも否定的な反応はなかったと推測できる。

以上のような読書欄の声や新聞報道から見えてくる、当時の人々がオリンピック招致ポスターが表象することを求めていたのは、一方には主催国である日本的なものが表象されることを求めていた。さらにもう一方には、読者の声からも多く書かれているように、北海道または札幌を「的確に」表彰することを求めいていたことがわかる。それに対して栗谷川による招致ポスターでは、それが的確に表されていないからこそ、批判が挙げられていたということになる。

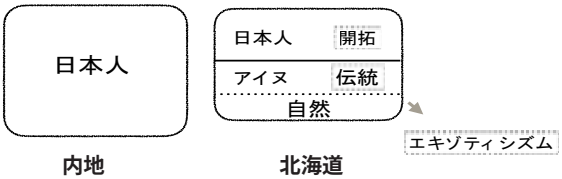

図 2　読書欄から見る北海道・アイヌイメージ

以上の読者蘭の声から見えてくるのは（図 2 を参照)、先述した日本人に対しアイヌを他者化し、劣位に置く言説を反映している点を読み取ることができる。声の多くが、このポスターは日本に対する誤ったイメージをもたらすと考えており、この誤りとは、近代化した日本社会の中に「ちょんまげ」、すなわち前近代的な野蛮な存在を日本のシンボルとして用いたことへの反感が背景にあると考えられる。

栗谷川の北海道イメージとアイヌ

栗谷川は、1911 年 2 月、岩見沢にて父林忠太郎、母たまきの三男として（7 番目の子ども）生まれた。父母ともに石川県出身である。生まれてから数日後、母の妹の嫁ぎ先、栗谷川家に養子となり長男として入籍した。キャリアを映画の宣伝用の看板作成から始め、その作風は、ポスター作成を始めた後も影響していた。

栗谷川は、北海道で生まれ育ち、郷土を描く作家であった。彼は、国鉄(当時）からの依頼の下で旅情を誘うタッチで北海道内での各観光地のポスターを描いていった。1936 年の秋、鉄道省札幌鉄道局（現・JR 北海道)が募集した冬の北海道観光ポスターに、一等で入選した。翌年も栗谷川は、同じポスター募集に応募し、2 年連続で一等入選を果たす。そしてこれらの実績がきっかけとなって、1938 年には札幌鉄道局の嘱託に迎えられた(鎌田 2012：77)。

1947 年には、札幌鉄道局から戦後初めて大判観光ポスターが発注され、そのあとは堰を切ったように仕事がくるようになった。観光庁を始め銀行、百貨店、商店、各種団体と、発注元は多彩を極め、ポスター、チラシからマッチのおもて紙にいたるまで、内容面でも幅広いものだった。1949 年には、横浜で開催された日本貿易大博覧会の北海道館の展示意匠を、翌年には旭川で開催された北海道開発大博覧会のテーマ館の展示意匠を、それぞれの広報ポスター類とともに、北海道から依頼された。1950 年 2 月には、札幌市と札幌観光協会の主催で、第 1 回さっぽろ雪まつりが開催され、最初のポスターを手がけたのも栗谷川だった（鎌田 2012：83-84)。

北海道の魅力を、蓄積した技術で精力的に描いた作品は高く評価され、中央でも脚光を浴びた。受賞作は多くあるが、阿寒湖に佇むアイヌ民族の女性を描いた「HOKKAIDO」で世界観光ポスターコンクールで最優秀賞を受賞した。その一方でサイロを描いたり、農場風景を描いたりと開拓地としての北海道イメージを描いていった。

栗谷川は、観光ポスターを書くにあたって心がけていたことを以下のように述べている。見る人の目をとらえ、旅への感覚を刺激して記憶にその印象を焼付けることが観光用のポスターには求められる。すなわち「未知へのあこがれと孤独の楽しさを旅情に結び、ポスターの上に実現したいものである。」(栗谷川 1959 年 2 月 15 日）と論じている。また

> 見る人の目をとらえ、旅への感覚を刺激して記憶の一角にその印象を焼き付けるーこうゆけば観光ポスターは成功である。私は旅する人の気持ちになってポスターを書きたいと思う。未知と孤独に歓喜と哀愁を見出し、知らぬ街の道を歩く時ふと味わう妙に寂しいようなたのしさは誰もが経験することではないだろうか。この未知へのあこがれと孤独の楽しさを旅情に結び、ポスターの上に表現したいものである。(栗谷川 1959 年 2 月 15 日)

とも論じている。そこで栗谷川によると、観光ポスターで描くべき対象は、

そのポスターを見る者にとって未だ知らないものであることが求められる。それを見る者、特に内地に住む日本人に印象付けることが観光ポスターに求められることとなる。当時の観光ポスターを主に日本国内向けに書かれており、見せる対象も日本国内の住人ということになる。

それでは、栗谷川は北海道に内地の人を引き付けるためのポスターの素材となるものはどのように捉えていたのだろうか。まずは栗谷川の北海道イメージについて見てみよう。栗谷川にとって北海道で生まれ育ったことが、ポスター作成の原点となっている。

> とにかく四十八年北海道の空気を吸い、目に見、体で感じた、北海道の四季が私という人間を作ってきたことは事実である。雪解けの小さい流れの光や、赤クローバーの蜜を吸うハチの羽音を聞く夏、生きもののような雲の動きと悲しいまでの短い秋の葉の赤と黄色、日暮迫る雪原の荘重なたたずまい―これらが今日も私のデザインを作ってゆく。(栗谷川 1959年5月16日)

これらの点から、栗谷川にとってまず北海道は厳しい冬や短くても美しい春や夏といった自然環境を意味していた。さらに北海道を特徴的に表すものとして、開拓というイメージがある。

> 屯田兵家族には、官給品として開墾生活に必要な最小限の用具が与えられたが、農民移住者は、各自が国から身の回り品とわずかな開墾用具を持ってきたのである。
>
> 明治から大正に至る60年の経緯の中で、北海道の土地に適応する様々な用具が考えられてきた。特に厳寒の体験皆無の移住者が、いかにこれに対して身を守り労働するか、独自のくふうがされたことである。……私たちは、開拓という貴い時代を生きてきたことに、誇りのようなものをもっている。(栗谷川 1982：24)

このように日本の各地から人々が来て、開拓者によって北海道という寒冷地で他地域には見られない独自の文化が発達したことを指摘している。

さらに栗谷川は輸入農機具をあげている。開拓使が寒地農業に牧畜畑作農法をとり入れることに着目し、明治 4 年ごろにはアメリカから畜力農機具を輸入した。栗谷川によると開拓当初の農具は、鍬、山刀、鎌、鋸などの手農具であったが、馬力によるブラウ類がやがて導入され、北海道農業の成立に大きな影響を及ぼし、その技術も変遷の道をたどることになり、それらのものも現在には使われていないかもしれないが、アメリカ的要素を含めた開拓地を象徴的に示すものとなる。

> 開道 110 余年、かつての生活用具は、そのほとんどが時代とともに消え去っていった。私の描いた民具は、古き苦しき時代を語るものである。しかし、どのような境遇の中にあっても、こどもたちは手近なものを遊び道具とする術を知っていた。私たちは、開拓という貴い時代を生きてきたことに、誇りのようなものをもっている。(栗谷川 1982：24)

栗谷川はポスターの素材として「テーマとするものは、牧歌調であり、エキゾチシズムであるー雪、夕陽、エゾ松、ポプラ、白樺、スズラン、クロバー、ライラック、羊、馬、牛、サイロ風車、麦わらぼうし、吊りズボン、そしてアイヌ、メノコ。」と上げている（栗谷川 1959 年 5 月 16 日)。雪からライラックまでは、北海道の中での自然が当てはまり、羊、馬、牛は部分的には自然であり、もう一方では開拓地を象徴している。さらにサイロ風車、麦わらぼうし、吊りズボンまでも開拓地を象徴しており、自然と開拓地を示すところで牧歌調をあわらしているのだろう。それに対してエキゾチシズムはアイヌでありアイヌの言葉で女性を意味するメノコが当てはまることになる。

栗谷川にとって、アイヌはエキゾチシズムを引き起こすものだったかもしれないが、しかしそれは同時に完全に他者化されることはなく、内地に対して北海道を象徴するものと捉えられていた。それは自分を含めた北海道出身者にとって、自分たちの先駆者であり、見習うべきものであり、北

海道の一部なのだ。栗谷川による北海道の心という文章では、植民者である和人とアイヌとを北海道を形成するものとして同列に描いている。

栗谷川はアイヌ民族を先住民として捉えており、アイヌは寒冷の北海道に定住し、生活を営んでいたと述べる。さらに、アイヌと日本人との関係については、和人との接触以前は狩猟、漁労など自然と一つになっての暮らしていたとしながらも、明治に入ると和人との接触が進むにつれ、その生活様式は急速に崩れていったと述べる。和人との関連もそれまで皆無というわけではなく、江戸時代から部分的ながら漁場の使役などに使われるなどの交流もみられると、アイヌの先住性を指摘するとともに、北海道という地理的範囲に共住するものとして捉えている（栗谷川 1982：24)。その表現の中には、日本人による支配性・権力性への強調は足りないかもしれない（それについてはまた後で言及する）が、少なくともアイヌを蔑視することはなくそのぶんに敬意を払っている。

アイヌ民族が独自の文化を守っていたころの織物・木彫などの生活用具にみる、その完成された美しさは、芸術性の高いものである（栗谷川 1982：24)、とその芸術性を評価している。また栗谷川は「アイヌ民族の着物、服飾、家庭用具、狩猟用具などは、機能と装飾に富んだ完成度の高いもの」(栗谷川 1982：32）と芸術的な評価を下している。それと同時に、その機能性についても別の文章で言及している。

> 織り物も木彫りも生活に密着した生活のための手段であった。寒さを防ぐためのきものづくりであり、えものをとるために武器を、食うために食器を作った。生活の知恵から生まれたこれらの用具が、とぎすまされたムダのない形を見せるときに、あの独自の文様でいろどられた作品が、かつての北海道に生まれていたことを思い合わせるのも無意味ではない。(栗谷川 1965 年 7 月 18 日)

栗谷川にとって、アイヌの文化とは寒冷の地に生活するのを可能とする技術に裏打ちされており、また同時に自然や動物との共存を可能とした文

化であった。そこから栗谷川にとってアイヌ文化は尊敬の念を払うべき対象であったことがわかる。

前節で紹介した札幌オリンピック招致ポスターに対する批判に対して、栗谷川は、「同ポスターは一般外国人を対象にした観光用ではなく、工業国日本の事情を知っているIOC委員の啓発が目標であり、五輪招致の目的からいって、バタくさい北欧風のにおいを盛ったポスターより、世界におけるサッポロ、東洋の日本で開こうという冬季五輪であることを強調したかった。アイヌ風俗が現代日本の姿と見誤れるということらしいが、私はアイヌを観光宣伝の道具として登場させたのでない」と反論している(北海道新聞 1966 3/1)。さらに「本道の開拓に当たって開拓者たちが学んだものは、先住アイヌ人の生活の知恵である。カンジキ姿でたくましく山谷を駆けめぐって生き抜くアイヌをとりあげたのもそうした意図からだ」と続けている（北海道新聞 1966 3/1)。

また「ウタリ協会の人たちが避難するような気持ちは全くない。むしろアイヌ民族への尊敬をこめ、この機会にアイヌの勇姿を再現したかった。このため、札幌図書館からアイヌ衣装を借り、モデルを使って交渉の面でもじゅうぶん配慮した。エキゾチシズムというが、アイヌは厳然と存在しているし、こんどの旭川国体にだってアイヌが登場しているではないか……」栗谷川さんは、あのポスターのバックで近代都市札幌の“イメージ”を描き、アイヌで本道開拓を“象徴”したかったのだといっている（北海道新聞 1966 3/1)。

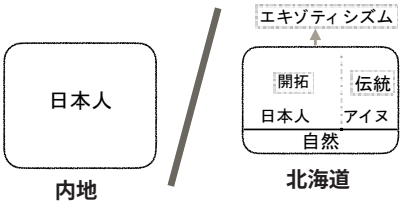

図3　栗谷川の北海道およびアイヌイメージ

以上の点から、栗谷川の北海道とアイヌイメージをまとめたのが上の図3である。最初に注目しておかなくてはならないのは、内地としての日本と北海道を明確に区別している点である。内地に住む人々に対して北海道を観光の対象とするためのポスターを描いていたことからも、内地に対して北海道を他者化する必要があった。

栗谷川にとって内地と区別された北海道とはいかなるものであったか。そこには基層として寒冷地としての生活する上では厳しい自然環境がある。その厳しい自然環境の元で生活を始めた開拓者たちが一方にいる。彼らは洋風な農耕器具を用いて荒野を開拓し、そこから栗谷川は北海道の一つのシンボルである牧歌的なイメージを導いている。

さらに栗谷川は、アイヌの人々を開拓者の先駆者として位置づけており、彼らの工芸品などに実践的にも美的にも高い価値を置いている。そこから開拓者と同様に北海道を構成する一つの要素と考えていることがわかる。そして、この開拓者の牧歌的な雰囲気とアイヌの文化的差異が、栗谷川にとっての、本土に対する北海道のエキゾチックなものの源泉となっている。

そこで栗谷川にとっては、札幌オリンピック招致の際に、北海道を表すものとして、アイヌをシンボル的な要素として用いたと考えることができる。つまり栗谷川にとっては、西洋的な技術や器具を用いた開拓により牧歌的な要素とアイヌという異文化を交えた雑種文化の地として描いていたことがわかる。

おわりに：北海道イメージとナショナルなもののずれ

1960年代には、観光アイヌに代表されるようにアイヌは日本人から他者化され劣等視されたものとして文芸や映画などで描かれてきた。その中で、札幌オリンピックを招致するためのポスターが、北海道で活動してきた栗谷川によって描かれた。それは、近代都市札幌を背景にして、正装し

たアイヌが立っているものであった。

このポスターに対して、新聞の記事や読者欄を見ていくと批判的な声が複数見られた。その批判点をまとめていくと、アイヌは北海道および日本を代表するものではなく、また海外に対して「時代遅れ」の日本イメージを海外に与えるというものだった。

栗谷川の他の作品や彼の考えを見ていくと、彼の中でポスターは、見る側に未知のものに関するイメージを与えるものである。そして、栗谷川にとっての内地に対する北海道の観光地としての要素は、西洋的な要素を含めた牧歌的な点でありアイヌであった。栗谷川にとって、日本各地から集まった開拓者とともに先駆者としてのアイヌは雑種文化としての北海道を表すものだった。だからこそ、栗谷川は札幌で開催するオリンピックを招致するポスターで北海道を表彰するものとして、開拓の先にある近代的な札幌の風景とともに伝統的なアイヌの姿を描いたと考えられる。

しかし、栗谷川の北海道表象の意図は、一部の者の招致ポスターに求めるものとのズレが生じており、それが新聞の投稿のような反応をもたらした。そのズレとして大きかったのが招致内ポスターを描いた栗谷川と一部の国民との間での北海道及びアイヌイメージのズレであった。栗谷川にとってはアイヌと開拓者は、少なくとも対等、さらに前者は学ぶべき先駆者として位置づけられていたのに対し、ポスターに批判的な者はアイヌを日本社会と対等なものと捉えるのではなく劣等視していた。このように、ポスターが表象すべきものの地理的対象とともにアイヌの位置付けのズレが、ポスターへの批判としてあげられたと考えることができる。

本論で取り上げた栗谷川による北海道イメージの中でのアイヌの描き方に関して留保すべき点がある。本論で論じたように栗谷川はアイヌの伝統文化を積極的に評価してきた。しかしそこには限界があった。東村が指摘しているように、栗谷川にはアイヌを観光に用いて否定的なイメージを日本中に浸透させた責任がある（東村 2006：）。この点に関しては栗谷川も、

後年アイヌを観光に用いたことに対して

> 私はアイヌの文化の高さを感じているし、弓一つ見てもすばらしい作品だと思う。彼らがかつて山野をかけめぐった姿には人間としてのあこがれを持ちます。しかし、それを私が観光の材料にしたこともまた事実なんですね。この問題は今後真剣に掘り下げて考えたいと思っています。(北海道新聞 1983 4/8 私の中の歴史)

と語っているように、栗谷川自身もアイヌを観光資源として用いたことに対する反省を行なっている。

また栗谷川にとってアイヌは描かれるべき存在であり、自分から声を上げるアクターとして捉えることはない。力関係に関してナイーブな視点を持っていたと言え、ポストコロニアルな視点からも批判の対象となりうる。

さらに注意を向けたいのは、本論で取り上げた新聞の社説や読書欄の声の多くは、現在ではヘイトスピーチまたはヘイトクレームと呼ばれてもおかしくない排外主義的なものである。このような記事が載っても、当時批判が起きてこないこと自体が、アイヌの人々を劣った民族とみなしていたことの表れである。そしてそれは、日本文化の純粋さを絶対視し、雑種性を受け入れられなかった状況を示していると言える。

最後に 2020 年の東京オリンピックに向けて考えてみよう。現在の日本において国を象徴するようなポスターにアイヌや沖縄そして海外にルーツを持つ者やモノを入れることができるだろうか。そしてそれを受けれられるだけ今の日本社会は多様性を受け入れられるようになっているだろうか。当時から 50 年以上経った現在に、かつての行いからどのように反省できるのか、それがオリンピックを通した教育にもなるだろう[2]。

注

1　北海道立近代美術館学芸員鎌田亨氏へのインタビューより 2017 年 12 月

2　本稿は科学研究費補助金基盤研究 A「身体文化の多様な価値を共有するためのスポーツ・アーカイブズのモデル構築」(研究課題：16H01867、研究代表者：

來田享子）の研究成果の一部である。

引用文献

アンダーソン B
1997 『想像の共同体』（白石隆、白石さや訳）NTT 出版、東京。
大塚和義
1996 「アイヌにおける観光の役割……同化政策と観光政策の相克」『観光の二〇世紀（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容』（石森秀三編）p. 101-122, ドメス出版、東京。
オリンピック冬季大会札幌招致委員会
1966 『第 11 回オリンピック冬季大会招致報告書』北海道。
加島卓
2017 『オリンピック・デザイン・マーケティング』河出書房新社、東京。
加藤典洋
2017 『増補　日本人の自画像』岩波書店、東京。
鎌田亨
2012 『栗谷川健一』北海道新聞社、北海道。
木名瀬高嗣
1997 「表象と政治性」『民族学研究』62 巻 1 号、p. 1-21.
1998 「他者性へのヘテロフォニー」『民族学研究』62 巻 2 号、p. 182-191.
小熊英二
1998 『「日本人」の境界』新曜社、東京。
崔銀姫
2012 「「観光アイヌ」とは何か」、社会情報学第 1 巻 2 号、p. 93-108.
齋藤玲子
1999 「阿寒観光とアイヌ文化に関する研究ノート：昭和 40 年代までの阿寒紹介記事を中心に」『北海道立北方民俗学博物館研究紀要』8、p. 111-124.
2001 「北海道観光案内のなかのアイヌ文化紹介の変遷：昭和期の旅行案内・北海道紹介記事の考察をとおして」『他者像としてのアイヌ民族イメージを検証する：文化人類学におけるアイヌ民族研究の新潮流』『昭和女子大学国際文化研究所紀要』6、p. 29-42.
東村岳史
2006 『戦後期アイヌ民族－和人関係史序説－1940 年代後半から 1960 年代後半まで』三元社、東京。

ましこひでのり
2002 『日本人という自画像』三元社、東京。
丸山隆司
2002 『「アイヌ学」の誕生』彩流社、東京。
Traganou Jilly
2011 Tokyo's 1964 Olympic design as a 'realm of design memory, Sport in Society, 14: 4, 466-481.
栗谷川健一
1959 年 2 月 15 日 「今日のデザイン 1 観光ポスター体験をぶちまける」『北海道新聞』
1959 年 5 月 16 日 「宣伝美術とその素材 私の作品を形づくるもの」『北海道新聞』
1965 年 7 月 18 日 「北のデザイン 10 生活用具 暮らしの中の『美術』に」『北海道新聞』
1978 年 3 月 26 日 「日曜インタビュー 北のデザイン 北方文化の原点」
1982 年 「北海道の心」『アトリエ』665、p. 24-32.